

ゼミ論文
『日米交流における“権力”の問題』

2008年2月
日本大学国際関係学部国際交流学科 3年
尾島雄大

I. 章立て

はじめに

1. 戦前期
 - I. 戦前の草の根の交流：
 - ラングストン・ヒューズの訪日「事件」
 - 日米学生会議
 - シドニー・ギューリックと「青い目の人形外交」
 - II. 草の根の交流と権力者の関わり
2. 戦後期
 - I. 戦後の草の根の交流：
 - SCAP の「民間交流促進方針」？
 - 「黒船祭り」のゆくえ
 - II. 草の根の交流と権力者の関わり

おわりに

II. 要旨

今日学生にとって手軽で身近な「国際交流」というと、留学生との会食、外国人の先生による語学の授業、また（金銭面の事情が許せば）海外への留学等、チャンスは格段に広がっている。様々な国の人々が、それぞれの国の垣根を越えて、独自の文化を教え合い、刺激を受けながら、相手の国の良さ、自国、または自分自身の良さや改善点を再認識し、相互に自己を高め、国家間の友好をもたらす機会である。そのため、国際交流を取り巻く環境は、国益や政治的意図、国家間の関係や国際情勢に関係なく、自由な雰囲気でお互いが発言しやすい環境が必要だと思われる。

しかし、国と国をまたぐという性質自体のためか、この交流は様々な事象によって妨げられたり、歪められることがあるように思える。特に注目したいのが、権力（特に政府や政府関係者）の影響力である。なぜなら「権力」は、それが適切と定義する国益を守るために「国際交流」を定義し、規制し、ある場合には中断させる力を持つからである。本論文では、戦前、戦中、そして戦後間もない頃の、権力と国際交流について考察する。その際戦前日本が植民地化していた朝鮮、台湾、満州等の国との交流はあえて除き、日米関係に焦点を当てた。そして、戦後の占領期と冷戦期と時代を追い、当時の交流活動の例と、権力の関わり方に注目する。すなわち日米交流において、いったい自由な草の根の交流は存在していたのか、いなかった場合 権力はどのように絡んでいたのか、そして、権力が危険、不要と考える交流、または権力が望む交流とはどのようなものだったのか — といったことを考えることで、20 世紀の日米交流の隠れた一面を考へ考察した。

日米両国民による草の根の交流はあったらどうか。日本の植民地支配を批判したため、訪日して文化人たちとの交流を図ろうとしたものの警察に追われ、のがれるように日本を発たざるを得なかった黒人詩人ラングストン・ヒューズ、議事項目があらかじめ日本当局によって組まれ、円卓会議での議論はもっぱら日本の大義、愛国心の正しさを訴えることで、参加したアメリカ人学生に ひそかに「退屈」と告白させた日米学生会議、民間の善意から発したはずが国威発揚のジェスチャーになりかわってしまった「人形使節」のエピソード、などを見るに、「ない」と結論せざるを得ない。戦後のアメリカによる日本占領の時代も、「一般人同士の間で温まる交流のエピソード」の陰には 冷戦戦略上の砦として日本を確保するために親米感情を日本人の間に広げようとする SCAP の思惑があった。全く自由な何ものにも規制されない日米交流というものは存在しなかった。

なぜ、このような事態が起こるのだろうか。政府などの権力は、他国と付き合いしていく上で、第一に国益を重視する。しかし、民間団体や個人で国際交流を手がけていこうとする人は、国益というものよりも、地球的規模での平和や人道主義、人間愛、そしてよりよい人間生活のための条件や環境を求めて行動する。そのため、権力者にとって、国益に損失を及ぼすようなものは邪魔な活動とみなされ、廃止されてしまったり、都合の良い活動にすり替えられてしまうのである。

では本当の意味での草の根の交流を行うためにはどうすればよいのだろうか。私は、まず、政府と民間の間で、国際交流を行う目的を一致させるよう努めることが大切だと思う。確かに現実問題として、国家の安全を考え、国益推進を第一にして行動することは必要である。しかし、国益ばかりでなく、地球全体にとって、人類全体にとって利益になる活動という点にもう少し重点をおくよう、民間と政府が目的を一致させる努力を行なっていくべきでないか。「国益追従型の

国際交流」という考えは、時代遅れとなっていくと思われる。